

撰大乘論における阿黎耶識の三相について

真田 英範

此界無始時 一切法依止 若有諸道有 及有得涅槃

諸法依藏住 一切種子識 故名阿黎耶 我為勝人說

此阿含兩偈証識体及名

（資料一）

云何仏説此識一名阿黎耶 一切有生不淨品法於中隱藏為果故

此識於諸法中隱藏為因故 復次諸衆生藏此識中由取我相

故是故名阿黎耶識

（資料二）

これは論文で、「応知依止勝相品第一」における衆名品一の衆名章の初めにある。又、このすぐ次に阿陀那識の説明がありその後に乗においても多くの別名によって仏はこの識を顕していたとある。以上の事情を考慮すれば、右の資料（一）、（二）の文は直接に阿黎耶識の体と相を述べたものではなく、

（一）一切法の立場に立ち、その根源又は中心に相当するものとして

阿黎耶識をとらえた（世俗の道理として道理世俗の立場）

（二）小乗の人々を誘引するために彼等の理解に添って述べた（随他

意の教え）

ということになると思う。

資料（一）の文を解してみよう。無始とは無知であり、真実への始まり（覚）がなく流転していることである。阿黎耶識は無知による六道輪廻の中心としての意味を持つ。無知をなくすればすなわち阿黎耶識を対治すれば涅槃に至るのである。一切法にとって阿黎耶識は種子識であり、阿陀那識といわれるが、これが染濁対治出世淨心因ともなるのである。それは最清淨法界所流正聞熏習による種子をも持つからなのだ。すなわち、阿黎耶識が、右では善惡兩道生死識と涅槃の依止であること、左ではその依止のあり方としての一切種子識であることが示されている。

資料（二）について。これは一切法の立場に立ち、阿黎耶識がその果であり又因であることをいう。更に衆生にとって我執の対象でもあることをいうのである。

二

復次成立此識相云何可見

此相略説有三種 一立自相 二立因相 三立果相 一立自相

者依一切不淨品法習氣為彼得生授持種子作器名自相

立因相者此一切種子識為生不淨品法恒起為因是名因相

立果相者此識因種種不淨品法無始習氣方乃得生是名果相

（資料三）

右の資料に述べられた三相こそ仏の本意を正しく直接に述べるものであり、前とは逆に、法性に対する無明世界の成立がいわれる。これは「応知依止勝相品第一」における相品二の初めにある。この文に続いて阿黎耶識の本質がいろいろな点より述べられている。

文を解釈してみる。まず自相とは。一切不淨品法は「応知勝相品

第二」の相章第一にいう顯現の十一識をいう。又最も直接的には最後の善惡兩道生死識を指すのである。この生死識は自己と他人の差別を持ち、それ以前のすべての顯現の識が六道の流転相の下にこの識に顯現している。この識は無明による法性への無知すなわち阿黎耶識の自界形成、それは個別化、差別化、実体化へのより明確な顯現への過程をとるが、その自界形成、顯現の極まりといえるものである。自相はそこから顯現した万人の生死識の習氣により形成され、法性への無知を識の本質とする。これはまた法性に従いつつも、自界（無明界）を形成していく。無明をなくせば皆、真実界に至るのだ。

次に因相とは。阿黎耶識はそれが含んでいた二面性（共と不共）のうち不共性の展開の因となることを指す。自相から万人の自界が形成されていくのであり、個性化の最初：これは極めて微細であるが、これを阿陀那識といい、種子識を本質とする。自界においても共、不共性はある、自界にとらえられた共、不共性という意味を持つ。阿黎耶識の相親差別において、共相は器世界種子、無受生種子といわれ、不共相は各別内入種子、有受生種子といわれる。

次に果相とは。万人の無知の習氣（有分、言説、我見）によりこの識が形成されることをいう。従って果相は実は無知による輪廻の中心・根源という意味しかなく当然に無覆無記である。これに個性と働きを生じるのは阿陀那識（論文に、此識或説為阿陀那識とある）からであり、これは有覆無記とされるのである。阿黎耶識の果報識としての形成において、有分習氣は増上縁として總報を形成し、言説と我見の習氣は因縁として別報を形成する。しかし、六道の差別又諸法又自己と他人が明確に顯現するのは先述の善惡兩道生

攝大乘論における阿黎耶識の三相について（真田）

死識においてであることに注意する必要がある。

資料(三)のあとに次の文がある。

由_レ不_レ了_二阿黎耶識体相及因果相_一如_レ彼生盲不_レ識_二象体相_一作_レ種種異説_上

若略説阿黎耶識体相_二是果報識是一切種子由_下此識攝_二一切三界身一切六道四生_二皆_レ尽_上

（資料四）

とある。右の資料において巧みな比喻に注目すべきである。

次に又、唯識三十頌に

阿頼耶識、異熟、一切種不可知執受處了常与触作意受思想思相應捨受是無覆無記触等亦如是恆転如暴流阿羅漢位捨

（資料五）

とあり、これは阿黎耶識の三相に相応する。ここに示された阿黎耶識の働きから、自界がより具体的に個別的に顯現していくことになる。

三

最後に成唯識論における阿頼耶識の三相と比較してみよう。

初能變識大小乘教名阿頼耶_二此識具有_二能藏所藏執藏義_一故謂与雜染_二互為_二縁故有情執為_二自内我_一故 此即顯_二示初能變識所_レ有自相_一攝_二持因果_一為_二自相_一故

（資料六）

右は自相であるが、三相は資料(四)の阿頼耶、異熟、一切種に相当している。自相が資料(二)に相当することが重要である。

この自相には法の顯現としての意味はすなわち資料(三)に見られた意味は全くないのである。この自相は従って個人的世界の顯現にのみ、他人は厳密にいつて顯現しない世界なのである。以上の事が摂論とは根本的に違う内容である。

（小田原城内高等学校）